

若林 顕さんに聞く

海外留学——1度はだれでもしてみたいと思うものであろうが、いざ、となるとなんだか雲をつかむような話だと思ふ人が多いのではないでしょうか。

私自身、未だ留学の経験もないし、外国での学生生活など、本当にやり遂げれるのだろうかという、不安のようなものを感じることがあります。

——留学のきっかけは。

「1983年の第2回日本国際コンクールの時、審査員として来日したオーストリアのハンス・ライグラフ先生が私の演奏を聴き、すぐに留学するようにと勧めたのです」
——それからの手続きは。

「当時、芸高の3年でしたから、翌年、芸大に入学し、それから8月まで田村宏先生が留学先へ手紙を書いて下さったり、私自身は向こうの会話学校を捜したりしました。ちょうどドイツ大使館へ電話をしてみたら、グラーツの会話学校がありますということで、すぐ申し込みました」

——ドイツ語についての苦労はなかったですか。

「初めはドイツ語をほとんど知らなくて向こうへ行ったものですから苦しかったです。会話学校で必死に勉強したら、2カ月程で生活に困らないようになりました」

——精神的な苦痛はなかったですか。

「実は、向こうに着いてすぐ、自転車に乗っていて事故にあいました。肩を痛めて、ピアノが弾けなくなりました。言葉のハンディもあるし、一人だったし、入学試験も迫っていたので、本当に日本に帰りたかった

ですよ。でも、なんとか無事に切り抜けることができました」

——下宿探しはどうでしたか。

「まず、最初にお世話になったところは、ピアノの音がうるさいとのことで追い出されて…。で、いまのところへ引っ越したんです。向こうでは、家具やベッドや食器等何んでもついていて、自分さえ移動すれば、いいわけです」

——どんな楽器を使って練習していますか。

「日本製の古いピアノを毎月借りる形で、下宿に持ち込んで弾いています。調子はあまりよくなくて、音が狂っていたり、出なかったり…。1日5時間ぐらいいは弾いています」
——自炊生活ですか。

「そうです。昼は学食が安いのでそこで済ませることが多いです。洗濯はコインランドリーです」

——モーツァルテウムの入学試験はどんなでしたか。

「バッハの平均律の中から一曲、ショパンのエチュードの中から一曲それに自由曲から一曲でした」

——授業内容は…。

「音楽史、楽器史、和声、合唱。一般課目はなく、あまり込み入ったカリキュラムではありません」

そこで、オーストリアのザルツブルクのモーツァルテウム音楽院に留学し、一時帰国されて、東京でのデビューリサイタル、N響との協演のほか、全国各地での数多くの演奏活動をされた若林顕さん＝埼玉県・日高町＝に留学に関する話などをお聞きしました——。

聞き手・西沢 綾（東京芸大1年）

——ライグラフ先生は、若林さんにとってどんな先生ですか。

「今後も、ますます深く教えていただきたいと思える、尊敬できる方ですよ。私がモーツァルテウムに行ったのも、ただライグラフ先生にみていただきたいためで、ザルツブルクにあこがれて行ったのではありません。留学する場合には、しっかりと先生を決めておかねば、と思いますね。行ったらどうにかなるという考えでは、危険だと思います」

——ライグラフ先生のレッスンは。

「入学直後の2カ月ぐらいはバッハのインベンションとか、モーツァルトのソナタなどで、多様なタッチを学びました。これらは曲としてというより教材として使うわけです。いろいろな曲を弾くのは、それができてからでした」

——レッスンの回数は。

「留学したばかりのころは毎日でした。先生のレッスンは不定期で、こちら側にみていただくものがあれば、毎日でもみてくださいます。けれども暗譜が最低条件です」

——85年ブゾーニのコンクールとき、選曲はどのようにされましたか？

「ライグラフ先生と合意のうえで自分に合うと思われるものを選びま

した」

—コンクールにはプレッシャーがありますか、それにはどう対処していますか。

「別にこれといったことはしていません。ただ、自分を信じていることです。人にはどのように思われようと、やっぱり、どんな時でも自分を信じ切れるということ、これは大切なことだと考えています」

—コンクールとコンサートとの違いは？

「コンクールは、その後、演奏家として立つための手段でしかないと思います。どちらもそれなりにたいへんですが…」

—コンクールを受けるときの心構えとして、何かアドバイスを…。

「たとえば、途中で落ちたとしても自分が荒れたりしたらダメだ、というところでしょね」

目標を掲げて練習を

—どんな風にして練習しているのですか。

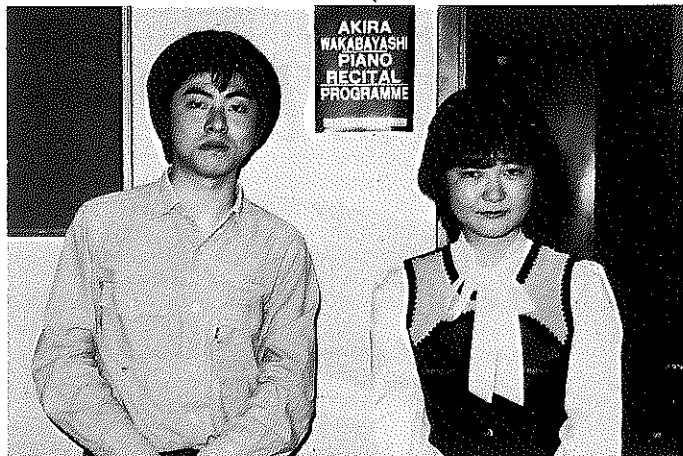
「練習の前に、これを達成しようと、目標を持ってやると大きな成果があがるでしょう。もし2時間というまとまった時間がとれれば、大変よい練習ができると思います。私は2時間という一つのセットを一日に何度か、繰り返しています」

—一人でさらう時、何に最も気をつけていますか。

「心があるかどうかです。心が無いのに、あるようにみせかけた演奏、たとえば、音をわざとずらしたり、必要のないルパートをしたり、といったことはしたくないと、いつも思っています」

—舞台恐怖に打ちかつためには。

「指だけ、あるいは体だけで覚えたものは人前に出ると自信がなくなります。楽譜を暗譜で書き出せるよ



若林顕さんと一緒にカメラにおさまる西沢綾さん

うな覚え方をすべきだと思います」

—その達成法は…。

「静かに楽譜を聞き、指は動かさず、ただ手の神経だけを感じながら読んでいくのです」

—自分が、あのようになりたと思うピアニストはだれ…。

「リヒテルです。彼の演奏は純粹で、ごまかしがありません。よく音楽に関係のない要素を取り入れ、みせかけをしてしまう演奏を耳にします。彼にはこういうことがない。私もそれを目標にしたいです」

—欧州へ行くと、日本人に対する偏見に出くわすことがありますか。

「そりゃあ、多いですよ。ただ、向こうの人は正直なので、こちらがきちんと言葉ができ、よい演奏ができれば認めてくれます」

—そのためにも語学が必要…。

「留学するのでしたら、できる限り言葉を勉強しておくべきですね」

—留学してよかった、と思っていますか。

「やはり、得るものがたくさんあります。私は本当に留学してよかった、と思っています。協力してくれます両親や兄に感謝しております」

—これから、どのように歩んでいきたいと考えていますか。

「たとえば、こういうタイプのピアニストになろう、と思って進むこ

とは、いまのところは考えていません。レパートリーを作るにしても、一曲の中には本当にいろいろな要素があって、一つのタイプを決めてかかってはいけないと思うのです。まだまだやるべきことは多いですが、私なりに全力でがんばりたいと思います」

教えられた挑戦の大切さ

◇インタビューを終えて◇

私が感じたことは、若林さんはいつも先のことへの希望を持っておられるということでした。

迷いのない人はいないと思います。しかし、若林さんをみていますと、その話しぶりなどから、そういうためらいなどまったく不必要であるということが、本当によくわかりました。

思い悩んでいたとしても、実際の行動に出ないことには、それは、はた目には何もないことと同じになってしまうのでしょうか。まずは挑戦すること。そのことの大切さを、私は教えていただきました。これからもがんばってください。

西沢綾